

建設時評

埋め草

東北大学 災害科学国際研究所
准教授 平野勝也

あまり美しくない言葉なので恐縮だが、「埋め草」という言葉をご存じだろうか。デジタル大辞泉での説明から類推するに、元来、「城攻めのとき、堀や溝を埋めるために用いる草やその他の雑物」のことを指していたようだが、そこから転じて、「空いたところや、欠けた部分を埋め補うもの。」として、比喩的な意味が定着したようである。出版業界では、「雑誌・新聞などの余白を埋めるために使う短い記事」を指すのだそうだ。もちろん、あまり良い意味ではない。予定の記事が全部揃わずに、余白ができてしまった時とかに、その余白を埋めるために適当な記事を入れ込む、その適当な記事のことを指すのであるから。

同様に、土木・建築の世界でも、「埋め草」という表現を使う。少し大きな敷地を扱うような、広場や公園や建築の設計では、様々なアイデアを組み立てて、空間を構成していく訳だが、そのアイデアがうまく出ずに、敷地に空白ができてしまうことが検討段階ではよくある。そういった空白に、適当に入れ込まれたものが、土木・建築の世界で言う「埋め草」である。学生に広場のデザインを課題として出すと、「噴水」が埋め草と

して人気のものである。設計案に、周辺の空間構成と関連性の感じられない噴水があると、「この噴水は埋め草だろう？」と、当然ながら教員から指弾されることになる。

※ ※ ※

さて、ご存じのように、東日本大震災による大津波で被災した多くの街や浜では、防災集団移転促進事業が進められている。低平地にあった住居を高台に移転する事業である。様々な矛盾や難しさを抱えた事業ではあるが、一刻も早い住宅の再建のため、とにもかくにも迅速に進めなければならない事業である。

もともと低平地にあった住宅が、高台に移転する訳だから、低平地には大量の住宅跡地が残ることになる。その跡地の土地利用をどうするのか、誰も明確な答えを出せないまま、一年半以上が過ぎてしまったのではないだろうか。

低平地に広大な公園を作る。いくつかの自治体で見られる復興計画である。確かに記念公園は必要である。しかし、政令指定都市である仙台市であっても、公園の維持管理はなかなか追いつかず、草ぼうぼうの公園が沢山ある。あまりに大きな公園は、下手をすると膨大な維持管理費を後世に遺す、負の遺産となってしまう可能性すらある。そんなことを考えると、この低平地の公園がどうしても件の「埋め草」に見えてならないのだ。つまりは、もっと良いアイデアがあるはずだと。

水産加工団地といった産業用地はどうだろうか。しかし、多くの被災した水産加工場の復旧・復興もままならない状況で、震災前以上の水産加工団地が必要だとは、到底思えない。蛇足であるが、そうした状況にもかかわらず、後背地の土地利用のためと称して、コストのかかるコンクリート直立堤が、漁港や港湾背後の防潮堤として計画されている例がいくつもあることには大いに疑問を感じている。被災地はそういう状況にはない。維持管理、更新費用を考えると、これも下手をする

と負の遺産になりかねないと危惧している。

話を元に戻そう。では、低平地に新規の産業を誘致出来るか。これは、海外への製造業の流出が止まらない日本の現状においては、水産加工業の拡大よりも難しいだろう。いや、それは固定観念だ。何か、被災地に相応しい、有力な新しい産業があるはずだ。太陽光発電所はどうだろうか。筆者の専門は土木であるため、子細は解らないので憶測であるが、仙台以南の平野部ならともかく、リアス式海岸部は、山が急峻であるため、どうしても日照時間的に不利であるように思えてならない。

では、歴史に学び、以前の高所移転においてなされた低平地の農地化はどうだろうか。津波をかぶった農地を再生するのならともかく、住宅が建っていた場所が対象なのだから、その基礎等々を取り除き、客土を入れ農地に転用するには随分とコストがかかりそうである。そのコストに見合った農業生産は可能なのだろうか。そして、その農業の担い手は誰になるのだろうか。そう思いを巡らせると、やはりそれも難しそうである。

結局、どんなに無い知恵を絞ってみても、思考を巡らしてみても、低平地をどう利用すればいいのか、確信を持った答えが見えてこない。どうしても、どれもが「埋め草」に見えてしまうのだ。

※ ※ ※

そもそも今回の復興は、大規模災害の復興としては初めての人口減少下の復興であることを、もう一度、強く認識しなければならない。人口が減少していく中で、どのように街をコンパクトに作り直すのか。そのための明確な制度や手法を持たないまま、日本は2011年3月11日を迎えてしまった。その文脈において、今回の復興まちづくりは、被災した街をコンパクトな街に作り直す、いわゆるスマートシュリンクの先鞭をつけなければならないのではないだろうか。

被災者の方々の安心感のために、街の復興

のために、スマートシュリンクの時代に、高台に新しい住宅地を造成し、市街地を拡大するのである。そうであれば、当然、その移転元である低平地は、何かアイデアを出して、新しい土地利用を考えるのではなく、少なくとも高台に市街地が増えた分だけ、市街地を減らすという発想の方が、自然なのかも知れない。

土地利用の空白に「埋め草」が埋まっているのは、良いアイデアがないからだ。良いアイデアを出して、きちんと埋め草でないもので埋めなければならない。それは、人口増加時代の先入観のなせる技ではないのか。今、被災地、そして日本の将来のために必要なことは、何か埋め草ではない土地利用を考えるのではなく、どうすれば、様々な権利関係の中で、市街地をスムーズに減らすことができるのか、そういう土地に対する必要最小限のインフラはどうあるべきなのか、もっとラディカルに考えれば、どうすれば管理の要らない安定した自然地に戻すことができるのか、そうした知恵こそが今必要なのではないか。それでこそスマートシュリンクの先鞭なのではないか。

しかし、そうは言っても、現在の復興事業の枠組みでは、そのスマートシュリンクを実現するようなメニューは何もないのではないか？ そうであれば、その市街地を減らすという「土地利用」でさえ、実現性のない、「埋め草」なのではないのか？

※ ※ ※

自分の中にも潜む強い先入観を解きほぐしながら、今、この時代の、この復興がどうあるべきなのか、秋の夜長に、あれこれと、思いつくだけのことである。